

「生きる」営み 問い直す

⑤

森本淳生

(フランス文学)



もりもと・あつお 1970年東京生まれ。クレルモン第二大学博士。2016年から京都大学人文科学研究所准教授。専攻はフランスの文学と思想。とりわけ象徴主義および18世紀の小説を研究する。最近の編著に『生表象の近代―自伝・フィクション・学知』(訳書に『マアレリ―集成 第3巻 〈詩学〉の探究』)などがある。

京大人文研 90年の学知

人文研では2015年から「環世界の人文学」と題した共同研究を行っている。

「環世界」とはドイツの生物学者ユクスキュルが、生きものとその世界の相互関係を名づけるために用いた言葉であり、自然科学を越えて、哲学をはじめとする人文学にも大きな影響を及ぼしてきた。昨今、開発や産業活動のもたらす地球温暖化や深刻な環境破壊など人類は危機的な状況にあるが、それに対処するためにももう一度冷静になって、そもそも「生きもの」にとって「生きる」とはいかなる営みなのかを考えなおす必要があるのではないかと、ひところ言えば、私たちの問題意識はこのようなものである。

もちろん「生きる」営みにはさまざまな側面があり、現実の中でそれは複雑に絡みあう。

例えば、生きものである人間は動物の一種だが、しかしいわゆる動物と人間の間にはやはり大きな違いがある。フランスの哲学者ジャック・デリダが指摘したように、一口に「動物」と言っても原生動物やノミから哺乳類にいたる無数の種が存在するし、南方熊楠が熱心に研究した粘菌が動物・植物双方の特徴をあわせもつ以上、動物と植物の区別も自明のものではないのかもしれない。また、狩猟や漁業は単に動物を利用することではなく、動物の生態に対する深い理解があつてはじめて可能になるものである。こうした中で動



南インドの農村で行われた儀礼で踊る神霊の憑坐(よりまし)。こうした営みを通して、人は環世界との関係を維持、活発化させてきた―石井美保撮影

環世界の人類学 多面的に捉える



イギリスの新聞「パンチ」に掲載された「父なるテムズ」。テムズ川に下水やゴミが捨てられ悪臭を放つて、このことを風刺している(1848年10月7日付)

物と人間の関係をどのように考えたらいいか。環境保全と動物保護、あるいは、動物の「権利」が語られる今、大きな問題である。



また一口に「環世界」と言っても、生きものとその世界とが常に調和しているわけではないだろう。生きものは摂取した栄養を消化して排出し、自分にあつた住まいを作りだすために「環境」を乱す。とりわけ産業革命以後の人類のあり方が、こうした生きものが不可避的に持つ「汚染」傾向を極限にまで拡大したことは周知のとおりである。だが歴史的に見れば、人間は堆肥を農業に利用するなど「ゴミ」をリサイクルするさまざまな技を發展させてきたし、この技はそれに携わる人々の独特な「営み」としても存在した。こうした技と営みには、ひたすら「ゴミ化」していく現代世界に対する処方箋のヒントが隠されているはずである。

このように私たちが考える「環世界」は、人間をとりまく単なる物質的な世界だけではなく、両者のあいだで展開されるさまざまな「営み」をも意味する。環世界にはだから、人間にとって神秘的なことがらも織りこまれている。民俗学や文化人類学が各地で観察してきたさまざまな祭りや呪術行為、憑依現象は、人と世界の関係を安定させるのに必要なものだが、それを乱し活性化させるものもある。他方で精神分析が明らかにしようとする人間の無意識は、い

わば「内なる環世界」であるとも言えるだろう。人は、意識的に捉えられないものとの関係を持たずには生きることができないのである。

人文研の共同研究は、理科系も含む異なる専門の研究者が集って知見を共有し深めることに特徴がある。「環世界の人文学」も例外ではない。ひたすら論文を生産することがよしとされ、大学ランキングだけがまやほとんどの唯一の関心事であるかに見える現在の日本の大学にあつて、こうしたやり方は「生産性」が低く、またるっこしいものであるにちがいない。しかし、そもそも「生きる」営みが複雑で多層的である以上、具体的な事例をひとつひとつ考えることで、私たちの知のあり方を柔軟で複眼的なものにしていく以外に方法はない。こうした営みを粘り強く続けていく中ではじめて、「生きもの」としての人間が培ってきた生き抜くための知を、理解し育むことができようになるはずである。(寄稿)

|| 毎月第3木曜に掲載します